

小説用テンプレート見本

真仲真緒

サイズA5。余白上下二十ミリ、左右十七ミリ。縦書き。

二段組み。段の幅二十一・四五字。（間隔三字）行数二十字。フォントMS明朝。フォントサイズ九ポイント。

一ページ目にタイトル・作者名の記載をお願いします。配置、フォントサイズは自由です。

ノンブルの記載は不要です。

以下、主催サイト掲載作品から抜粋。

そこには湖が広がっていた。

世界地図に載るほど大きくはないが、それでも対岸の様子はぼんやりとしか見えない。

こんなところがあったのか。

バストゥーニの奥地、クロイツとの国境近くに佇む村の外れにその湖はあった。この世に生を受けてからずっと暮らしてきた住み慣れた国であり、職務で各地の小村を回ることも多かったことから、知らない土地はないと思っていた。しかし世界は広い。

たかだか十数年生きてきた中で何を知ったつもりでい

たのか、レオは自身の半生——にもならない己の歩んできた道をそつと振り返った。

「まさか旅をすることになるとはな……」

それもシンと二人で。

これまでの人生から考えるとこの一瞬は全て夢物語のように思えてきて、言葉にして、これが現実であることを自分に言い聞かせる。何があるかわからないのが人生なのだと。

後悔しているのかと聞かれたら返答に困るだろう。その答えは見つかりそうにない。あるいはこの旅で見つけられれば——。

塵にもならない微かな望みを連れ立ちに抱いたところで、彼の姿が見えないことに気づく。

「シン？」

一人で散策に出てしまったのだろうか。広い湖の前に一人取り残された不安がもくもくと心に広がり始めたが、湖にかかる栈橋の端に深い藍色の頭を見つけてそつと安堵する。彼は湖面を覗き込んで誰かと話をしているようだった。

「シン。何をしているんだ？」

隣に並び、彼と同じように湖面を覗き込むと、そこには真白な羽毛に覆われた一羽の鳥がいた。黄色い嘴をシンに向け、小さな鳴き声を上げる。

「こいつ、俺の言葉がわかるみたいだ」

つぶらな瞳を真つ直ぐに受け止めたシンは真面目な顔でそんなことを言った。

「……鳥だぞ」

「見ればわかる。だけど頭がいいんじゃないか？ ほら、また俺の言葉に応えるように鳴いた」

タイミングよくまた嘴を開けてみせた鳥にそんなことを思いたくなる気持ちもわからなくはないが、シンが言うところか冗談に聞こえない。

まあ、見ている分にはいいか。

一方的な会話を繰り返してシンはとても楽しそうで、レオはふつと肩の力を抜いた。

一人と一羽は暫く会話とは言えないやり取りを交わしていたが、不意につつと鳥が桟橋を離れていった。あ、と名残惜しそうに声を漏らしたシンは、鳥の後を追うように足を一歩踏み出し、そして桟橋から足を滑らせる。

「うわっ」

「馬鹿っ……！ シン!？」

盛大な水飛沫を上げて湖に沈んでいく姿が見えた。肝が一瞬で冷えるが、思いの外彼はすぐに顔を出し、無事な姿を見せて身の安全を報告する。人騒がせな連れ立ちに腹の底から溜息を吐き出した。

「まったくお前は……」

「いいだろ、無事だったんだから」

悪びれなく答えるシンに苛立ちが身体を走ったが、この男はこういうやつだったと自身を納得させる。今更こんなことで腹を立てていてはこの先が思いやられる。

二度目の溜息は嘔み殺し、水中のシンに手を差し伸べた。陸に上がる手助けをしてやろうと思ったのだ。しかし、繋いだ手の力強さにそれは叶わぬこととなった。

「おい、ちよつとやめ——」

盛大な水飛沫が上がる。伸びてきた腕に引つ張られ、逆にレオが湖へと落ちてしまった。頭の先まで水中に潜り、まともに空気を吸えるまでに数十秒がかかる。

ようやくの思いで水面に顔を出すと、意地悪い笑みを浮かべるシンと目が合った。

「馬鹿って言ったお返しだ」